

第5問 A 問3

第5問 世界史に関わる経済・統計の資料に基づく授業を想定した、次の会話文A・Bを読み、下の問い(問1～6)に答えよ。(配点 18)

A イギリスの綿工業に関する授業

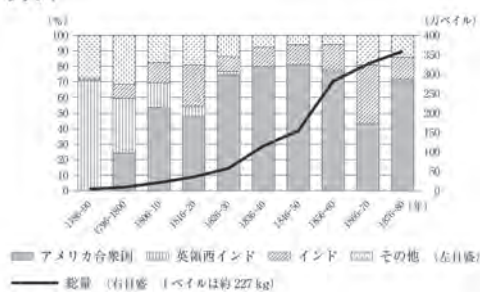
先生：今日は、産業革命をリードしたイギリスの綿工業について学びます。表1は、ワイシャツ生地の原料となる細い綿糸の価格の推移を表しています。原料綿花コストと生産コストの合計が綿糸価格です。

表1

年	1779	1784	1799	1812	1830	1860	1882
原料綿花コスト(x)	24	24	40	18	7.75	6.875	7.125
生産コスト(y)	168	107	50	12	6.75	4.625	3.375
綿糸価格(x+y)	192	131	90	30	14.5	11.5	10.5

※単位：綿糸1ポンド(約454g)当たりリペンス

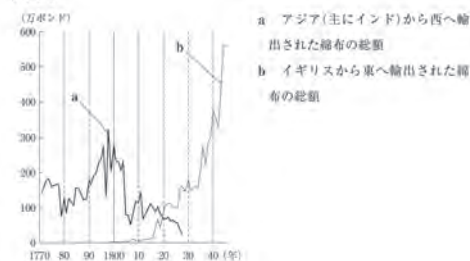
グラフ1



(※編集部注：先生と生徒の会話の一部を省略)

先生：最後に、東西間の綿布の流れを示すグラフ2と、これまでの表1やグラフ1を参考にして、イギリスの産業革命によって、当時の経済状況がどのように変化したのか、パネルにまとめてください。

グラフ2



問3 先生の指示によって生徒たちが作った次のパネルのうち適当でないものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 31

- ① 1820年頃に境に、イギリス産綿布の東への輸出総額が、インド産綿布の西への輸出総額を上回りました。
- ② 産業革命期において、イギリスの綿糸価格が下落した最も大きな要因は、原料綿花コストが下がったことです。
- ③ 19世紀半ばのイギリスは、アメリカ合衆国産の綿花を主な原料として綿布を生産し、インドなど東へ大量に輸出しました。
- ④ イギリスで産業革命が進展した時期には、イギリスからの綿布輸出と、イギリスへの原料綿花の輸入は共に増加傾向にあります。

問題の構成と出題内容

会話文、文章資料、グラフ、地図と、資料がより多彩に

大問の数は5大問だった。全体を通して、センター試験と同様に幅広い時代・地域・分野から出題されていた。

出題形式では、前回の試行調査と同様、連動式や複数選択の形式が見られ、複数の資料の読み取りを必要とする、新しい傾向の問題が引き続き見られた。例えば、第2問Bでは、文語体で書かれた初見の文章資料を読み、帝国主義時代のフィリピンをめぐる国際関係についての理解や、著者の活動内容を一般化して考察することが必要だった。前回の試行調査よりも文章資料の分量は少なかったが、文章の大意把握と歴史的背景を踏まえてあてはまる活動を結びつけなければ答えられない問題だった。また、知識のみを問う正誤問題に代わって、歴史的事象の原因・背景・影響などを問う問題や、同時代の世界、時代の特徴を捉える問題が散見された。地図と年代整理を組み合わせたリ、文章資料を讀解して国と国の関係を考察したりするといった力

が必要だろう。

前回の試行調査と同様、時代を大観し、歴史的事象の背景・要因やその根拠についてより深い考察が求められたといえる。提示される資料も、会話文や文章資料によるリード文、グラフ、絵画、地図など多彩だ。授業では、個々の歴史的事象の背景や因果関係などを、根拠となる資料に基づいて生徒自身が既習事項と結びつけながら考察するよう促したい。

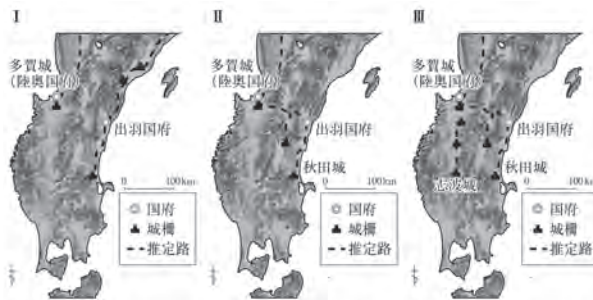
注目した問題とその分析

複数の統計資料を基に多面的・多角的に考察する

第5問は、授業場面を想定した教師と生徒との会話文を通して、複数の統計資料を読み解く問題だった。中でも、イギリスの産業革命の影響による経済状況の変化を考察したパネル内容が妥当であるかを判断する問3では、問1・問2で提示された図を踏まえて表1の内容を読み取って解答する。イギリスの綿糸価格下落の要因を、原料となる綿花のコストだけでなく、生産コストからも考察する必要があり、問題を解き進めていく中で、多面的・多角的に考察する力が求められた。

第2問 問3

問3 東北地方の官道や国府・城柵は、「中央政府にとり蝦夷支配の重要拠点であった」が、方位を逆転した次の地図Ⅰ～Ⅲを参考にすれば、「蝦夷にとり中央政府の脅威を象徴するものであった」と見ることもできる。その根拠として、**地図から読み取れる情報**の中から正しいものをX～Zから選び、選んだ**情報**と**歴史的事実**a～cの組合せとして正しいものを、下の①～⑨のうちから二つ選べ。 10・11



(群馬県立歴史博物館「古代のみち」, 地理院地図などにより作成)
 (注) 地図中、陰影の薄い部分は平野部を表す。

地図から読み取れる情報

- X 中央政府はこの地域には国を設置しなかった。
- Y 中央政府はこの地域の平野部から支配域を拡大していった。
- Z 中央政府はこの地域の太平洋沿岸部に城柵を多く設置した。

歴史的事実 (a～cはすべて正しい)

- a 蝦夷は、しばしば多賀城や秋田城を襲撃の対象とした。
- b 中央政府は、城柵の近くに関東の農民を移住させて開墾を行った。
- c 蝦夷は、独自の言語や墓制などを保持した。

- ① X—a ② X—b ③ X—c
- ④ Y—a ⑤ Y—b ⑥ Y—c
- ⑦ Z—a ⑧ Z—b ⑨ Z—c

問題の構成と出題内容
**考察・選択・判断する力が
 大問で求められる**

大問の数は、前回の試行調査と同様、6大問だった。幅広い時代・分野からの出題であり、すべての大問で考察・選択・判断する力が求められていた。一部の問題では、考察した過程や結果を、理由や根拠に基づいて説明する力も必要だった。

出題内容を見ると、これまでのように「史資料から何が読み取れるか」が重視された問題が多かった。提示された史資料も、古文書史料、主題に沿った年表、碑文の写真、南北を逆にした地図、複数のグラフなど、多彩であり、処理すべき情報量は前回並だった。

そして、複数の史資料を、提示された史実や既習事項と関連づけ、根拠となるデータを選び、仮説を立て、その検証のためのデータを選ぶなど、踏み込んだ思考力・判断力が求められている。例えば、第5問の間2は、提示されたグラフでは関税収入額が1894年以降上昇していることから、関税自主権の一部回復が想起できたかがポイントと

なった。複数の史資料から浮かび上がって見えるものは何かという視点で、史資料の読解を授業で行うことが一層重要になる。

また、正解が1つではない問題も出された。第6問の間7は、近代の転換点としてポツダム宣言の受諾、1945年の衆議院議員選挙法改正のどちらを支持するか問われ、理由との組み合わせが正しければ、どちらを選んでも正解となった。

注目した問題とその分析
**読み取れる情報と史実を
 組み合わせさせて考える**

第2問の間3は、古代国家による東北地方への支配の推移についての理解を問う問題で、中央政府が整備した官道や城柵が周辺地域に与えた影響を捉え、その評価の根拠となる歴史的事象を示すという内容だった。提示された地図から平野部を中心に進出していたことを読み取る技能に加え、史実と適合するかどうかを点検する力が求められた。

また、地図が南北が逆向きに提示されたように、中央政府の東北経営を「蝦夷の立場」から捉えていたことも、新しい視点として注意したい。

正解 10-11……4-5 (両方正解の場合のみ得点、順序は問わない)

第3問 問6

問6 ミズホさんたちが文化祭で展示資料Ⅲについて説明していると、他の生徒から質問があった。次の会話文中の空欄カとキに当てはまる文の正しい組合せを、下の①～④のうちから一つ選べ。 [18]

他の生徒 「世界の食文化は多様というけれど、最近は欧米諸国の文化が世界中に広がって、食文化はどんどん画一化されていってるんじゃないかな」

ミズホ 「確かに画一化している面もあるね。日本でも [カ] しているね」

他の生徒 「日本での食文化の画一化について、何か説明できるデータはないかな」

アズサ 「例えば [キ] を比較してみたらどうだろう」

ツバサ 「長い期間の推移をグラフにしてみるの必要がありそうだね」

T フランス料理店やスペイン料理店など各国の料理を提供する店が立地

U アメリカ合衆国の巨大企業が全国各地でハンバーガーショップを展開

X 日本と欧米諸国の1人当たりカロリー摂取量とその内訳

Y 日本と欧米諸国の農産物輸出額とその内訳

- ① カーT キーX ② カーT キーY
 ③ カーU キーX ④ カーU キーY

問題の構成と出題内容
センター試験より問題数は少ないが、1問のボリューム感が増加

今回の試行調査では、地誌の出題が比較地誌を含めて1大問であり、大問の数は5大問だった。センター試験よりも地誌で1大問減ったが、問題文の長さや資料の点数は同程度だ。むしろ、会話文など比較的長い文章を読んで判断する問題もあったため、1大問にかかる時間が増加したと考えられる。

出題内容はセンター試験と同じで、全分野から出題された。変化や差異を考察させる問題、地理的事象をモデル化して考察する問題や、仮説を立てる際に根拠となった資料を判断する問題など、出題や解答の形式は前回の試行調査と同様に多彩であった。提示された資料は、GISや仮想地域の模式図、地理院地図などだった。ほとんどの問題で資料が用いられ、複数の資料を組み合わせて複合的に判断する問題もあった。問題を解く上で必要となる知識のレベルは、センター試験と大きく変わらない。ただ、仮説の検証方法を考察したり、根拠となる資料を選ば

せたりする問題も見られ、思考力が一層重視されている。例えば、第1問の問4は、「今年の夏季は例年に比べて暑かった」という感覚を、客観的に検証する方法を考えるという新傾向の問題だった。また、複数の資料から判断する問題や、模式図の中から解答を選ぶ問題もあり、総合的な学力が必要だといえる。

注目した問題とその分析

根拠となる指標を論理的に判断する力が求められる

第3問の問6は、会話文から食文化の画一化について考察し、日本の事例をとらえた上で、食文化の画一化の根拠となり得る資料を正しく判断する問題だ。

選択肢であるT・U及びX・Yの内容に誤りはなく、会話文の「画一化」「説明できるデータ」の文脈に沿った文を論理的に選ぶことがポイントだ。例えば「キ」は、食生活が似通ってきていることを示すためにXのデータを用いると判断できる。仮説や検証に基づく問題は今後も出題される可能性が高く、根拠となり得る指標は何かを論理的に判断する力が求められる。